

秋田県男鹿方言ローマ字表記法再説

著者	近藤 清兄
雑誌名	東北大学言語学論集
号	26
ページ	1-8
発行年	2017-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130469

秋田県男鹿方言ローマ字表記法再説

近藤清兄

キーワード：東北方言 方言ローマ字表記

0.はじめに

(イ)1995年に筆者は筆者自身の方言である秋田県男鹿方言のローマ字表記法を初めて発表した[※ 1]。以来何度かの改変を経て2005年頃に現在の「無補助記号方式」に至っている[※ 2][※ 3]。無補助記号方式を採用するに至った大きな要因の一つは、いかなる環境においても楽に書いて問題なく表示され印字されうることであった。

(ロ)しかしこんにち、PC上、Web上の印字環境がよくなり、補助記号や英字26文字以外のラテン文字について心配がなくなってきた。

(ハ)また、これを紙の媒体に印刷して読者に供することを考えるとき、「読みやすい(そして、見栄えのする)」ものであることは無視できない要素である。地域社会の理解と協力を得ながら方言と地域文化の記録・保存・コンテンツの発信をしようとする際、これは小さくないことであると思う。

(ニ)については、[アクセント核のありかを示すのに、アポストロフィに代えて]アクセサンテギュ(˘)、æ(アッシュ)の字、イントネーション表示のためのアクセサンシルコンフレックス(˘)及びウェッジ(˘)を導入した方式を改めて定めたい。現行の無補助記号方式を「プレーン」と呼ぶことにし、この新方式は「ファンシー」と呼ぶことにする。[※ 4]

(ホ)この新方式は「プレーン」を置き換えてしまうものではなく、目的に応じて使い分けられるものである。[※ 5]

(ヘ)上の(ハ)でも触れたが、新方式「ファンシー」は、活字化した場合の読みやすさを求めたものである。

(ト)一方、イントネーション表記については筆者に考えがあるので、ファンシーの(˘)(˘)に対応する表記方法をプレーンについても工夫してみる。つまり、プレーンにも変更点がある。(先に結論を述べると、ファンシーの[昇り音調](˘)に対応するプレーンのカウンターパートは現行通り「?」であるが、[降り音調](˘)に対応するものとしては新たに「!」を設ける)[※ 6]

(チ)アクセサンテギュに加えてイントネーション表記用に(˘)(˘)を持つシステムは、クセ語のような「そこだけ高い」アクセント核のある方言を表記するのに適していると思う。東北地方の太平洋側(旧陸奥国側)の方言にはひろく応用が可能ではないかとも思われる。[※ 7]しかし秋田県男鹿方言(東北地方の日本海側、旧出羽国側、の、[東京方言に似た]降りアクセント核の体系)についても応用することができる。[※ 8]

1.ファンシーの表記法について

「ファンシー」はどこを変更したものであるのかについて述べる。

	現行プレーン	ファンシー
アクセント	「滝」にアポストロフィを書く	次に下がるところの直前に

/æ/	<æ>	アクサンテギュを書く <æ>
重母音	<a-e>→<ai>	これにアクサンテギュを重ねることが印字上 困難である場合はアクサングラーヴを併用す るか、従来の記法を用い<æ>とする。 <ai> (トレマを使い<a ë>と書くのもよからうが、 無闇に新しい記号を増やさない方がいいよう にも思う)
第1音節の「長母音」 ah, ey, iy, ow, uw (※必要に応じハイフンで割る)	ow'gami(狼)	マクロン(上の横棒)を用いて ā, ē, ī, ō, ū とするが、ここにアクサンテギュを重ねる ことが印字上困難である場合はアクサン グラーヴを併用するか、従来の記法を用いる。 ōg àmiまたはōwgami ä, ë, ï, ö, üで代用してもよいと思う【※9】。 その場合は<ai>の代わりに<a ë>は使えない。
撥音+ア行、y	(95年式)アポストロフィで割る →(現行)ハイフンで割る	アポストロフィが空きになるので復活
	(kon'y à→)kon-ya(今夜)	k ón' ya
	(zen' in→)zen-in(全員)	zen' in
	(ren' a-ekàn→ren-a-e' kan→)ren-ai' kan(恋愛観)	ren' aikan/ren' aëkàn
イントネーション 昇り音調を「?」で。	昇りを(˘)、降りを(ˆ)で。【※10】	

2.新プレーンの変更点

さて、「ファンシー」を新設するだけでなく、「プレーン」もまたいささかの改訂をここで受けることになるであろう。

現行プレーンに連なる、1995年以来の筆者の方式では、一貫してクエスションマークをもって昇りイントネーションを表す習慣であった。しかし一方で「降り」の音調を表す方式を持たずにきた。実のところ、近藤(2014)において狭義の(降りの)疑問音調の表記法についてあれこれ試行錯誤したことの原因はそこにあった。今回、「(「昇らない」)のではなく、はっきりと)「下降する」イントネーションを表すのに、エクスクラメーションマーク「!」を用いることにしてみる。実は年来こうしたことを想定して、「!」はできるだけ使わず空きにしていた。今回実際にこの意味で用いることに踏み切ったわけである。

3.ファンシーと新プレーンの表記例

近藤(2014)では狭義の「疑問音調」を表記する方法について考えた。そこでは最後の母音を延長した上で「滝」を作るのだと解釈することにした。今回定めたファンシーと新プ

レーンでは、イントネーション表記を独立させることになったので、「疑問音調」表記はイントネーション表記の問題に帰せられることになった。以下にその表記例を掲載する。スラッシュの左側がファンシー、右側が新プレーンである。[※ 11]

使受否完	有核	無核
I 類		
-----	kágû/ka'gu! (書)	yagû/yagu! (焼)
-----	mózû/mo'zu! (持)	
-----	tórû/to'ru! (取)	norû/noru! (乗)
-----	kamáû/kama'u! (構)	waraû/warau! (笑)
-----	sawáxgû/sawa'xgu! (騒)	cinaxgû/cinaxgu! (繫)
-----	eráxbû/era'xbu! (選)	toxbû/toxbu! (飛)
-----	nómû/no'mu! (飲)	kumû/kumu! (汲)
-----		sinû/sinu! (死)
-----	dásû/da'su! (出)	kasû/kasu! (貸)
II 類		
-----	mírû/mi'ru! (見)	nirû/niru! (煮)
-----	kagérû/kage'ru! (掛)	yagerû/yageru! (焼)
不規則		
-----	kúrû/ku'ru! (来)	surû/suru! (為)

むすび

以上、20 年以上を経てきた筆者の秋田県男鹿方言ローマ字表記法の新たな試みについて述べた。筆者にとって重要な記録・分析用具であってきこの表記法体系は、今後はその成果の地域社会への発信と問いかけのために用いられてゆくあらたな段階に来ていると思っている。簡潔かつ正確に書けて、それで書いたものは一意に再生されうるようなシステムであってほしいと願い、彫琢してきた。方言記述・記録に関心を持つ方々の御意見、御叱正を今後とも待つところである。

注

※ 1 : 近藤(1995a)。これを「95 年式」と呼んできた。

※ 2 : 現行の無補助記号方式の概要を再掲する。近藤(2006) p.18、及び近藤(2010) pp.101-102 の注 1 を参照。

【母音】

i	u
e	o
ae[æ]	a

例

hi	hu
----	----

he	ho
hae	ha

【子音】(要点)

xb 前鼻音化した b
 c [ts]
 xd 前鼻音化した d
 f ハ行音 h の変種。唇歯～両唇摩擦音
 xg 軟口蓋鼻音
 (x) 鼻音化記号
 xz 前鼻音化したザ行音

【子音の中和規則】

- (甲) ゼロ子音の後(すなわち、ア行で)、e と i は中和
- (乙) 次の子音の後、i と u が中和:c[ts]、n、r、s 及び(x)z。つまり、歯及び歯茎の関与する子音。
- (丙) i/u の前で t、(x)d はそれぞれ ci/u、(x)zi/u に合流。
- (丁) 次の子音の後では i と u は中和しない:(x)b、(x)g、h(f)、k、m 及び p。つまり、唇(ハ行音は p に遡るものと考えられるため、ここに入る)及び軟口蓋の関与する子音である。

凡例 i/u 中和する(区別がなくなる)

i:u 区別がある

i/e:u(イ列とエ列の区別がない)－(ゼロ子音、つまりア行)※なお、ア行には ae はない。

i/u:e(イ列とウ列の区別がない)－s、c、z、xz、r、n、(歯・歯茎の音)

i:u:e(3 者の区別がある)－h、b、xb、p、m、k、g、xg、

(唇の音と軟口蓋の音。h は唇の音にさかのぼれる)

t+i/u → ci/cu

d+i/u → zi/zu

xd+i/u → xzi/xzu

(i と u の前で t・d・xd は c・z・xz と中和する)

シャ行 sy(sh とは書かない)

チャ行 cy(ch とは書かない)

ジャ行 zy(j とは書かない)

「e と u が中和して i と対立する」ものはない。

「i・e・u すべてが合流する」ものもない。

※3：方式の変遷は大略以下のようなものである。近藤(2006)の注1(pp.35-36)に経緯を記したことがあるが、その後のさらなる小改変もあり、また筆者の記憶違いなどがあったため、改めて記す。(1)まず近藤(1995a)ではアクセントをアポストロフィを用い、また中位の前鼻音はb、d、g及びzの真上にティルデを乗せた。これを「95年式」と呼んだ。(2)近藤(1996b)において、末位に核が来る場合にアクセントを書くことにした。95年式では「末位に核のあるもの単独」と「無核の形式」の書き分けができなかった。これをもって「95年式改」とした。(3)しばらく「95年式改」を用いて書くうち、近藤(1999)において「第1音節の長母音」の問題を扱い、それに伴って表記法を改良した。ここで「無補助記号方式」について案を出している。(4)近藤(2002)で、アクセントをアポストロフィで書き表すことにし、æを<ae>と書くことにした。b、d、g、zの真上に印字していたティルデは、~b、~d、~g、~zというように、左側に書いておくことにした。PC上で楽に書ける方法(スーパーインポーズがなく、すべて1次元的に並べていく)をそのまま論文の表記法にした。無補助記号方式の始まりである。近藤(2004)もこれと同様の方式であった。(5)近藤(2005)。ここで~b、~d、~g、~zを、元々空き文字であったxを使って<xb><xd><xg><xz>とした。これで無補助記号方式が確立したことになるが、どうしたことか本文でも注でもこの変更について断っていない。どこかでこの方式に変えることを断ってあるものかと思っていた。多分筆者は聖霊女子短期大学での授業(当時は「卒業課題」。現行の「卒業研究」に相当)で先行して用いて(「ミレニアム」と称していたものがこれであったはず)いたので(だと思う)、自分としてはすでに当たり前になっていて思い違いしたのではなかろうか。近藤(2006)であらためて、空き文字のxを用いてティルデを廃したことを述べているが、ローマ字表記の変遷の経緯を記した注1では「x」に言及していない。この「空き文字になっているx」を用いるというやり方は、多分当時ネットで見た、補助記号なしでエスペラントを表記する方式をまねたのだと思う。c ウェッジ(チョー)のかわりに cx、g ウェッジ(ヂョー)のかわりに gxといったやりかたである。uにカップ(重母音の副母音になる、非成節的な短いu)も ux と書いていた。近藤(2010)では2006年の方式について改めてまとめている。(6)近藤(2014)で、狭義の「疑問音調」の表記方法について考えた。本文「2.新プレーンの変更点」参照。(7)近藤(2015)では、分析の便宜のこともあって ate の重母音<a-e>をハイフンを廃して<ai>と書くことにした。これが無補助記号の最新版、現行の「プレーン」である。近藤(2016a)と近藤(2017)では2006年の無補助記号方式と同じものだとしているが、実際には a-e を ai と書くことにした後のものである。

※4：近藤(2017)注17(p.43)にその名が初出。

※5：そもそも筆者の方言ローマ字表記は、現場でメモをとるための道具として構想されたもので、「正書法」を意図したものではなかった。近藤(1995a)p.84 参照。しかし「ファンシー」はそこから一歩踏み出し、「正書法」を志向しはじめたともいえる。

※6：のちに見るように、これは近藤(2014)で論じた「疑問音調」の表示方法に関連する。

※7：じっさい、今回この方式(とりわけ、(˘)(˘)の件)を工夫するきっかけになったの

は、ある YouTuber の福島浜通り・いわき方言(話者は現在東京都在住だが、勿来出身だという)を聞いていて、そのカナ表記を工夫していることであつた。その方言はカナ書きに加えて(多分「そこだけ高い核」とみてよいであろう)アクセント核のありかを示すためのアクセントギョ(カナ文字の上に書く)、とイントネーションを表すアクセントシルコンプレックスとウェッジを使えば十分に正確に記録できるように思われた。なお筆者は平成 29 (2017)年夏に勤務先の研修で福島県南相馬市(鹿島区、原町区、小高区)とその周辺(楡葉町、浪江町)を訪れたが、これらの地域の方言も同様の方式でよく記述できるであろうと感じた。

※ 8 : 「デフォルトで始まりからずっと低く、〈そこ〉だけが高く、あとはまた下がる」のと、「〈そこ〉で下がるまでは高い(第 1 モーラと第 2 モーラの高さが一東京アクセントも秋田アクセントも基本的にそうであるように一異なっていなければならないか、下がるまでは初めからずっと高いままでもよいのか、はともかくとして)」のとでは、最後に高かったところ(次から低くなる場所)にアクセントギョを書けば足りる、ということは同じであるといえる。

※ 9 : 長母音をトレマで表す方式は、アイマラ語に例がある。j i s a[xi:sa]’yes’

※ 10 : ケセン語正書法のアクセントシルコンプレックス(^)とウェッジ(˘)はイントネーションを表すだけでなく、2 モーラ音節(長母音、重母音、重母音由来の〈ai〉[æ]、閉音節)の中における「そこだけ高い核」を表示するのにも用いられているが、われわれの「ファンシー」での(^)と(˘)はイントネーションを表すことだけに用いられる。

※ 11:使役・受身・否定・完了の助動詞のない裸の形を示す。

参考文献

- 秋田県学務課〔編〕(1929):『秋田方言』,秋田県(印刷:はかりや印刷所、秋田市).
- 秋田県教育委員会〔編〕(2000):『秋田のことば』,無明舎出版,秋田市.
- 井上史雄(1980):言語の構造の変遷―東北方言音韻史を例として―,柴田武〔編〕(1980)所収.
- 今石元久(1982):方言母音のホルマント ―秋田県男鹿市の発音などに依拠して―,
『国語学』128号,国語学会,東京.
- 打矢義雄(1970):『秋田の方言』,秋田協同書籍,秋田市.
- 大野為田(1984):『男鹿の方言』,懶大瀾印刷,男鹿市.
- 男鹿市教育委員会〔編〕:(1993):『男鹿の昔ばなし(昔話・伝説・ほか)』,
男鹿市教育委員会,男鹿市.
- 清瀬義三郎則府(2013):『日本語文法体系新論―派生文法の原理と動詞体系の歴史』,
ひつじ書房.
- 近藤清兄(1995a):秋田県男鹿方言のローマ字表記について,
『聖霊女子短期大学紀要』第 23 号 pp.83-104, 聖霊女子短期大学, 秋田市.

- 近藤清兄 (1995b):ローマ字版・男鹿の民話、『高清水の岡』第2号 pp.21-28,
聖霊女子短期大学英語科, 秋田市.
- 近藤清兄 (1996a):秋田県男鹿方言の動詞形態論,
『聖霊女子短期大学紀要』第24号 pp.73-93, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (1996b):秋田県男鹿方言の形容詞形態論,
『東北大学言語学論集』第5号 pp.47-62, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄 (1997a):秋田県男鹿方言の名詞形態統語論,
『聖霊女子短期大学紀要』第25号 pp.83-99, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (1997b):秋田県男鹿方言の時間表現,
『東北大学言語学論集』第6号 pp.59-66, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄 (1998a):秋田県男鹿方言の不変化詞,
『聖霊女子短期大学紀要』第26号 pp.40-46, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (1998b):秋田県男鹿方言の合成名詞と接辞,
『東北大学言語学論集』第7号 pp.51-66, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄 (1999):秋田県男鹿方言の第1音節母音の「長さ」について
『東北大学言語学論集』第8号 pp.29-34, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄 (2000a):秋田県男鹿方言の欠式動詞,
『東北大学言語学論集』第9号 pp.31-38, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄 (2000b):「ニガッテ」考ー秋田県男鹿方言の悪行者標識ー,
『日本方言研究会 第71回研究発表会 発表原稿集』(於・安田女子大学),
日本方言研究会.
- 近藤清兄 (2002):ハル・ヘル考ー秋田県男鹿方言の自動詞・他動詞対ー,
『聖霊女子短期大学紀要』第30号 pp.67-71, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2003):ドデンスルとタマゲルー秋田方言の驚き表現ー
『聖霊女子短期大学紀要』第31号 pp.18-40, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2004):男鹿方言動詞否定形のアクセント構造,
『聖霊女子短期大学紀要』第32号 pp.42-55, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2005):秋田県男鹿方言の動詞句構造ー「スベガ」構造を中心にー,
『聖霊女子短期大学紀要』第33号 pp.19-35, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2006):秋田県男鹿方言動詞の例外的アクセントについて,
『聖霊女子短期大学紀要』第34号 pp.18-40, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2007):秋田県男鹿方言動詞のオノマトベ構造,
『聖霊女子短期大学紀要』第35号 pp.23-32, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2010):秋田県男鹿方言の「行き止まり終助詞」についてースベガ構造再説ー,
『聖霊女子短期大学紀要』第38号 pp.77-105, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2011):秋田県男鹿方言の動詞連用形について,
『聖霊女子短期大学紀要』第39号 pp.52-68, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2012):秋田県男鹿方言動詞の命令形・仮定形について,
『聖霊女子短期大学紀要』第40号 pp.47-60, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (2013a):秋田県男鹿方言のノダ文について,

- 『聖霊女子短期大学紀要』第41号 pp.34-48, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
 近藤清兄(2014):秋田県男鹿方言の疑問音調について,
 『聖霊女子短期大学紀要』第42号 pp.12-28, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
 近藤清兄(2015):秋田県男鹿方言の動詞活用形とアクセント・I類動詞編,
 『聖霊女子短期大学紀要』第43号 pp.46-61, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
 近藤清兄(2016a):秋田県男鹿方言の動詞活用形とアクセント・II類及び不規則動詞編,
 『聖霊女子短期大学紀要』第44号 pp.30-46, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
 近藤清兄(2016b):秋田県男鹿方言の動詞活用形とアクセント・形容詞及びコピュラ編,
 『東北大学言語学論集』第24号 pp.31-42, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
 近藤清兄(2017):ターミネーション論ー秋田県男鹿方言の用言句終結構造ー,
 『聖霊女子短期大学紀要』第45号 pp.37-46, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
 近藤清兄・寺田奈津子(1996):津軽方言ローマ字表記の試み,
 『The Crystalline 《高清水の岡》』第3号 pp.43-48, 聖霊女子短期大学英語科,
 秋田市.
 佐藤尚太郎(1993):『男鹿の方言集・改訂版』,大成印刷,秋田市.
 佐藤稔(1982):秋田県の方言,飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一[編]:
 『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』所収,国書刊行会,東京.
 柴田武[編](1980):『講座 言語 第1巻 言語の構造』,大修館書店,東京.
 東條操(1951):『全国方言辞典』,東京堂出版,東京.
 東條操(1954):『標準語引分類方言辞典』,東京堂出版,東京.
 中山健(2001):『語源探究 秋田方言辞典』,同刊行委員会,秋田市.
 北条忠雄[編](1968):『方言録音資料シリーズ6・秋田県男鹿市脇本大倉方言』,
 国立国語研究所話しことば研究室,東京.[非売品]
 北条忠雄(1995a):『秋田ことば』,秋田魁新報社,秋田市.
 北条忠雄(1995b):『解説 秋田方言 ◇その諸相を探る◇』,
 「解説秋田方言」刊行会、秋田市.
 山浦玄嗣(1986):『ケセン語入門』,共和印刷企画センター,大船渡市.
 山浦玄嗣(2000a):『ケセン語大辞典 上 文法編 語彙編 A-M』,無明舎出版,秋田市.
 山浦玄嗣(2000b):『ケセン語大辞典 下 語彙編 N-Z・記号』,無明舎出版,秋田市.
 吉田三郎(1971):『男鹿寒風山麓方言民俗誌』,秋田文化出版社,秋田市.

(こんどう・すがえ/聖霊女子短期大学生生活文化科講師)

Romanizing the Oga Subdialect of Akita: Revised for 2017

KONDO, Sugaye

lecturer at

Holy Spirit Women's Junior College, Akita.